



筑紫女学園大学リポジット

A Categorical Approach to the Preposition of

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1026

前置詞 of の意味とカテゴリー

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to the Preposition *of*

Takafumi OGATA

1. はじめに

本稿はカテゴリー分析を通して、前置詞 *of* を考察する。カテゴリー分析とは、カテゴリーと成員の関係を通して、語句や構文の意味をカテゴリースキーマで表すものになる。本稿では *of* の意味を、カテゴリースキーマで表す。前置詞 *of* は他の前置詞と比べても、その意味の多様性のために、捉えることが難しい前置詞である。この多様性にもかかわらず、前置詞 *of* には中心スキーマが存在すると考える。この中心スキーマをもとに、様々な意味が広がっていることを示していく。

結論から述べれば、*of* の本質は[離れたつながり]である *¹。典型的な B *of* A で考えると、A (*of* の目的語) と B (その被修飾要素) が離れてつながっていることを示す(以下、A は *of* の目的語、B は被修飾要素として A と B を用いる)。このつながりには、移動を伴う場合と伴わない場合がある。移動を伴う場合、B から A が移動して離れるが、つながりが残っているとす。移動を伴わない場合、B から A が離れた状態で、つながっているという静的な意味になる。*of* の意味は大きくは、〈移動〉〈出現〉〈特徴づけ〉の3つがあるが、各々単体 / 複合体の区別があり、位置特性を持つ場合と持たない場合がある。本稿では *of* が持つ多様な意味が、中心スキーマから派生したもので、すべてがネットワークをなしていることを示すことを目的とする。

以下の構成は2節で、単体 / 複合体の区別と位置特性について見る。そして3節で、*of* の意味の全体的な広がりを概観する。そして3つの意味を具体例を示しながら4節で〈移動〉の *of*、5節で〈出現〉の *of*、6節で〈特徴づけ〉の *of* を見ていく。

2. 単体 / 複合体と、位置特性

緒方(2020)で用いた道具をここでも用いる。緒方(2020)では8つの前置詞 (*at, in, to, for, from, on, by, with*) に対して、カテゴリー分析を行った。その分析にあたり、まずカテゴリーが単体か複合体かの区別を行った。単体 / 複合体の区別は、カテゴリー内の成員が意識されるかしないかの違いになる。単体ならば、成員が背景化されるため、成員は意識されず見えない。そのためカテゴリー全体のみが見える形となり、いわば単体として存在する(以降、単体と呼ぶ)。一方複合体ならば、成員が前景化され、カテゴリーも成員も両方見える。カテゴリーは成員の複合体として存在する(以降、複合体と呼ぶ)。(1a)の *committee* は単体、(1b)の *committee* は複合体になる。

- (1) a. The committee is looking into the case. b. The committee are all for the first plan.

なお単体 / 複合体の区別は基本、前置詞の目的語に適応される。例えば in の目的語はカテゴリーが複合体、at の目的語はカテゴリーが単体であることを要求する (cf. 緒方 2020)。

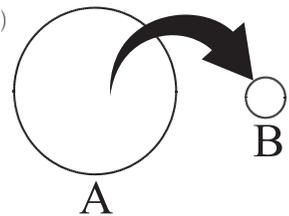
of でも、この使い分けがある。of の典型的表現 (B of A) で言えば、A (of の目的語) が単体か複合体かで関わってくる。A のカテゴリーが単体であれば、A 全体が点扱いとなり B とつながる。一方 A のカテゴリーが複合体であれば、成員が見えるため、カテゴリー A の成員と、B がつながる。つまり成員が関係づけの対象となる。

次に位置特性がある。カテゴリー分析では本来、カテゴリーと成員の関係を表すことで意味が特定される。しかし前置詞においては、それに加え、カテゴリーと成員の位置関係で記述されるものがある。on が代表的ではあるが、of の場合は、位置特性を持つ場合と持たない場合がある。持つ場合は、両者がつながりを保ちつつ、物理的 / 抽象的に離れていることを表す。位置特性がない場合は、単に A と B のカテゴリースキーマ上での関係で意味が定まる。以下3節で前置詞 of の意味の全体像を概観し、その後の節で、用例を見ていく。

3. 前置詞 of

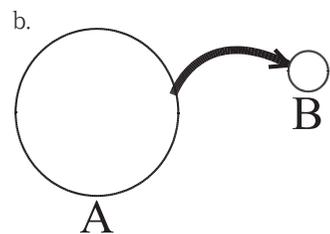
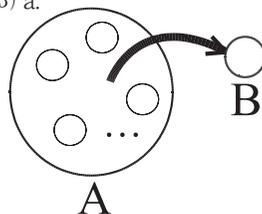
前置詞 of は、前置詞の中でも、多様な意味を持つ。この理由に、(i) スキーマ上に方向がある場合とない場合があること、(ii) 方向性がある意味に2つ (<移動> と <出現>) あること、(iii) of の目的語が単体と複合体の両方あること、(iv) 位置特性がある場合とない場合があること、(v) of の目的語 A、被修飾要素 B のどちらにもいろいろなカテゴリータイプがあることがあげられる。

この多様性を捉えるため、中心スキーマから意味が派生すると考える。中心スキーマは、(2) になる。A は前置詞 of の目的語、B は of 句の被修飾要素として、A と B を用いる。A から B が移動するも、両者につながっていることを示している。つながっていることを太線の矢印で示す。A と B が離れていながら、つながっているとは、B が A の属性を引き継ぐとか、B とつながりを保ちつつ、A が移動の起点となっているなど、何らかの関連を持つことを指す。



この中心スキーマ(2)をもとに意味が派生する。このとき of の意味は、大きく3つに分けられる。一つめに、<移動> の of がある。この意味は中心スキーマに一番近い意味になる。B が A から移動する。このとき「A から」に2種類ある。

(3) a. 一つはカテゴリー A が複合体の場合で、複合体ゆえに成員が見える。そのため(3a)に示すように、A 内部の成員が移動する。一方カテゴリー A が単体の場合、中の成員



が見えないため、カテゴリー全体が点扱いとなる。(3b)のように A 全体を起点として、そこから B が移動する意味になる。

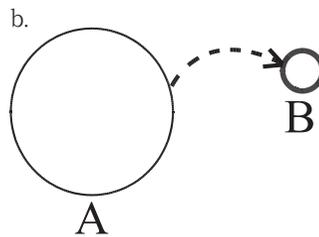
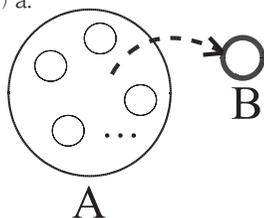
次に〈出現〉の of がある。本来であれば、〈出現〉と〈移動〉は、明確に区別される。というのも〈出現〉の意味は主観的には[移動の軌跡]または[移動元]がなく、突然出現する意味になるからである。

移動の軌跡がないということは、本来そこには他者とのつながりなど存在しない。しかし of の場合、その根底に A(of の目的語)と B(被修飾要素)につながりがあり、両者は関連付いている。このつながりが、移動の軌跡と混同され、〈移動〉か〈出現〉かの判断を難しくしている。of が持つ A と B のつながりが、of における〈出現〉と〈移動〉の区別を難しくしているのである。

そこで本稿では、どこに焦点があたるかで、〈移動〉と〈出現〉を振り分けることとする。つまり物理的・抽象的移動に焦点があたる場合、〈移動〉と考える。(3)では移動部分(矢印)に焦点が当たる(矢印を太く表記)。一方〈出現〉では、(4)に示すように出現結果に焦点が当たる(B を太丸表記)。

(4a)ではカテゴリー A が複合体 (4) a.

で、中の成員が見える。A の成員が B として出現する。(4b)ではカテゴリー A が単体で、中の成員が見えなくなっている。そのためカテゴリー A は点扱いとなり、A を起点

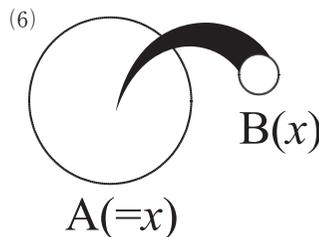


として、新たに B が出現する。(4ab)どちらも A と B にはつながりがあり、何らかの属性を引き継いだり、関連づいている。このつながりにより、B の出所元が A であることが特定される(破線矢印で、どこと結びついているかを示す)。

最後の3つめの意味に、〈特徴づけ〉の of がある。B(被修飾要素)を A(of の目的語)が特徴付ける。B だけでは情報が不足する、あるいは新たに情報を補充するときの用法になる。ここでは被修飾要素 B が変項(x)を持つと考える。B は何(x)かということ A だと、変項の値が A と述べる表現となる。B は A と関連付けられ、情報を補完する。例えば(5)では founder, author, creator だけでは情報が不足しており、各々変項(x)を持ち、それが何なのかが特定される必要がある。

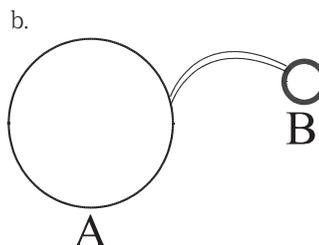
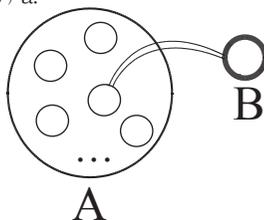
- (5) a. the founder of biogeography c. the creator of chess programs
b. the author of the book

これをスキーマで示すと(6)になる。(2)とは異なり、単に関係付いていることを示しているため、矢印がない。(6)では、B(被修飾要素)が変項(x)を持つことを B(x)、A(of の目的語)が x の値であることを A(=x)で示している。つまり B の変項の値が A であるとするので、B の意味が充足され、意味が補完される。ここでもカテゴリー A には、複合体/単体の



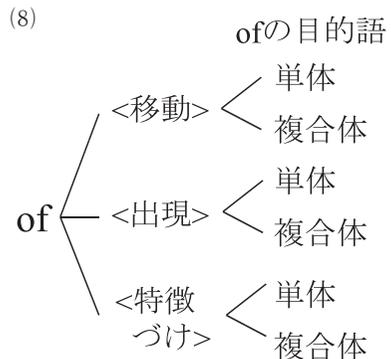
(7) a.

区別があり、2種類に分けられる。スキーマで表したものが(7)になる。(7a)では、カテゴリー A(of の目的語)が複合体で、中の成員が見える。その成員と B(被修飾要素)がつなが



る。成員レベルで関連付く。一方(7b)では、カテゴリー A は単体であり、中の成員は見えない。よってカテゴリー A 全体と B(被修飾要素)が関連付く。

以上具体例を含めずに、of の意味の全体像を示した。表にしたものが(8)になる。前置詞 of には、〈移動〉〈出現〉〈特徴づけ〉の3つの意味があり、各々が of の目的語が単体か、複合体に分かれる。しかし実際の用法は、(8)の単体 / 複合体の区別に加え、さらに複雑である。位置特性が関わったり、カテゴリーの種類が異なったり、様々な用法が存在する。そうした用法に命名しながら、具体例を示していく。4節で〈移動〉の of、5節で〈出現〉の of、6節で〈特徴づけ〉の of を見る。



4. 〈移動〉の of

一つめの意味〈移動〉では、A(of の目的語)から B(被修飾要素)が移動し、つながったまま離れる意味を持つ(スキーマは(2))。このとき〈移動〉の意味は、大きく3つに分かれる。一つめは[起点からの視点移動]で、A(of の目的語)が起点となり、B(被修飾要素)が移動し離れる。抽象的な移動だが、A が起点という位置特性が働く。離れるが、A と B にはつながりがある。二つめは[起点からの取り出し]になる。位置特性の意味合いは薄く、眼前に何かを取り出すような含意がある。かごの中の A(of の目的語)から、B(被修飾要素)を取り出す意味合いになる。3つめは[移動とその結果状態]である。移動することで、結果として A(of の目的語)と B(被修飾要素)が離れることを示す。

以下、具体例を示しながら見ていく。このとき〈移動〉の of には、A(of の目的語)が単体か複合体かで大きく2種類に分けられる(スキーマは(3))。まず複合体の場合、成員が見えるため、A の成員が起点となる。一方カテゴリー A が単体の場合、成員が見えないため、全体が起点となる。

4.1 起点からの視点移動

[起点からの視点移動]の用法で一つめは【起点からの距離(A: 単体)】がある。起点 A(of の目的語)から、視点の移動により、B(被修飾要素)が離れた距離を表す用法になる。A から B 分だけ離れるという意味になる。そこには視点という抽象的な移動がある。カテゴリー A はすべて単体で、位置特性が関わる。例えば(9a)では、ホテルから1マイル離れていることを意味する。

(9) a. The museum is within a mile of the hotel.

b. The area is packed into 3 square miles of the city center.

類似の用法として、【起点からの方向(A: 単体, 複合体)】がある。(10)では東西南北、(11)では左右の方向に起点 A(の中心)から視点が移動する。また(12)に示すように、移動の方向と離れた距離を同時に表現することもできる。(10)は A が複合体で、A の中心からの視点移動になる。(11)(12)は A が単体で、A 全体が起点となっている。

(10) His parents live in the north/south/east/west of Spain.

- (11) The houses are visible to the right/left of the building.
 (12) The town was located fifty miles north/south/east/west of Cambridge.

また方向を明示せず、【起点からの離れ(A: 単体)】を示す用法がある。wide や out*2 などを用いて、起点 A から B が、(幾分か)離れていることを示している。wide では起点 A から少し離れていることを、out では A の外へ移動して離れたために、A とのつながりがなくなることを意味する。

- (13) a. His guess was wide of the mark. b. His shot went just inches wide of the goal.
 (14) a. He saw her go out of the room just now. b. Maybe the key just fell out of the pocket.

次に尺度が関わる【尺度上での起点からの離れ(A: 単体)】の用法がある。尺度上で、起点から離れることを表す。(15)では尺度上で、起点 A(of の目的語)から上下する方向を B(被修飾要素)で表現する。ここには抽象的視点の移動があり、位置特性がある。また尺度には、時間の用法がある。アメリカ英語で前を表す of の用法がこれにあたる。(16)では4時前10分(3時50分)の意味で、起点 A(4時)から B(10分)分だけ離れる。離れるには4時の後と前があるが、ここでは前を指す。

- (15) My car cost me upward of twenty thousand dollars.
 (16) Ten of four

4.2 起点からの取り出し

次に[起点からの取り出し]がある。起点からの取り出しは、かごに入ったものから取り出すという意味合いになる。取り出すときに、移動のイメージが生じる。かご(の中のもの)と、取り出すものはつながっており、関連付いている。起点 A(of の目的語)は複合体になる。

[起点からの取り出し]の一つめに、【一つ取り出し(A: 複合体)】の用法がある。カテゴリーの成員から一つを取り出すもので、典型的には(17)に示すような最上級、比較級があるが、(18)のように one や、(19)のように日付の用例もある。この場合、A(of の目的語)は、複合体となる。

- (17) a. the most important of these three b. the older of the two women
 (18) a. one of the planning tasks b. one of the most popular games
 (19) the 16th of September

次に【複数/割合を取り出し(A: 複合体)】の用法がある。複数個あるいは割合で取り出される。B(被修飾要素)に数詞や割合などの表現が現れる。ここでも A(of の目的語)は、複合体となる。

- (20) a. The gate was guarded by two of my crew. b. He tried several of their beers.
 (21) a. 30% of the population volunteered during the period.
 b. 40% of the price (cf. 40% off the price)

また【全体から部分の取り出し(A: 複合体)】の用法がある。A(of の目的語)が全体を表し、B(被修飾要素)が部分を表す。A は複合体なので、成員が複数見える。その中から、B を「取り出す」という感覚が、移動のイメージとつながる。カテゴリーの成員の中から、認識できるまで眼前に移動させる意味合いを持つ。(22)では成員の一部から、(23)には所有物や関わるものから取り出すという含意がある。(23a)では所有するものから、(23b)では関わるものから、B が取り出されている。

- (22) a. the windows of the house b. the citizens of the country c. the contents of the report

- (23) a. a room of your own b. the crown of the world champion

次に【位置特性を伴う部分取り出し(A: 複合体)】の用法がある。部分は部分なのだが、一体化した一部で、いわば位置を伴う用法になる。(24)がその例になる。また(25)のように体の一部が切り離されておらず、一体化している場合、単なる部分にとどまらず、位置特性があると考えられる。

- (24) a. at the top of the web page b. the corner of that bed c. the edge of the board

- (25) a. the arm of the boy b. that long neck of the deer c. the back of the statue

さらに【特性の取り出し(A: 複合体)】の用法がある。カテゴリ A(複合体)から、その属性を取り出す意味になる。A(ofの目的語)は単数名詞のこともあるが、カテゴリは複合体であり、中の成員が見えて意識されている。例として(26)のような例がある。

- (26) a. the blue of the sky b. the stillness/silence of the night

なおこの属性がメタファー表現と置き換わった【メタファー属性の取り出し(A, B: 複合体)】の用法がある。Aから属性を取り出し、それを持つ典型的ものに置き換える。このときAもBも複合体になる。B(被修飾要素)が複合体で、その中の成員が見えることで、成員である特徴的属性に焦点が当てられる。そしてAとBの両者の属性成員同士が結びつけられる。

- (27) a. a very umbrella of a woman c. a mountain of a wave

- b. an oyster of a man (安藤 2012: 62)

- (28) a. a hell of a fight b. an angel of a child c. a giant of a man

4.3 移動とその結果状態

移動と、移動後のAとBが離れた結果状態の両方に焦点があたる用法がある。それが[移動とその結果状態]で、位置特性があり2つの用法がある。一つめは【移動と結果状態に焦点(A: 単体)】になる。ここでは移動した結果、AとBのつながりがなくなる結果状態を表す。移動の方により強い焦点があるものの、結果状態にも焦点がある。(29)に示すようなrobやdeprive等の例がある。

- (29) a. He robbed her of her purse. d. Poverty deprived the children of education.
b. The runway was cleared of snow. e. I was relieved of my heavy responsibility.
c. They will ease you of your burden. f. I made various efforts to rid him of troubles.

移動には、物理的/抽象的移動のいずれもある。ただ行為対象は、B(被修飾要素)である。Bに対して何かがなされたという構文になっている。ここでのBは、移動に関しては移動元となっている。そのため通常の移動と向きが、逆になる。BからAが移動する。普通はAが起点となり、Bが移動するのだが、ここではA(ofの目的語)が移動物になっている。

離れることを主眼にすれば、AでもBでもどちらが動いてもいいのだが、移動性(移動の容易さ)の違いのためにこうしたことが起こる。A(ofの目的語)の移動性が高いため、配列と関係なくAが移動する。動詞が移動元のBを行為対象とするのは、移動元に何が起こったかを述べる構文だからである。そのため仮にAからBが移動したと考えたとしても、Bに移動性がないため、跳ね返されるような感じで、Aが移動するとも考えることができる。ここでは実際の移動の向きというより、移動によりAとBが結果として離れた状態となり、つながりがなくなったことを表すこ

とを主眼としている。そのため B から A が移動するという逆のことが起きている。

二つめは【移動の結果状態に焦点(A: 単体)】の用法で、B が A から抽象的に移動したために、B と A のつながりが無くなるか弱くなったことを形容詞で示す。一つめとの違いは、移動の概念がかなり弱いことにある。出現と似ているが、有る状態から無い状態への移動という含意があり、それをもとに結果状態に焦点を当てている。例を(30)に示す。

- (30) a. His old age is devoid of comfort. c. He is very short of money.
 b. He is independent of his father. d. The main street was empty of people. (安藤 2012: 59)

5. 〈出現〉の of

本節では〈出現〉の of を見ていく。ここでは4つの出現に分けて考察する。一つめはモノの出現、二つめは状態・態度の出現、三つめは行為の出現、四つめはイベントの出現になる。ここでも A (of の目的語) が単体の場合と、複合体の場合がある。

5.1 モノの出現

まずモノの出現だが、一つめに【材料からの出現(A: 単体)】の用法がある。これは原材料から何かが作られるまたは出現するという意味になる。(31)に示すように、A (of の目的語) が材料となり、材料をもとに B (被修飾要素) が出来上がる。

- (31) a. a soup of wild boar b. a mixture of peat and sand c. a building of glass and concrete

これは make の過去分詞(made)が付き、より明瞭に材料からの出現を表せる。ここでは B は材料との見た目のつながりが求められる。一方 made from では、from は起点を表すだけでつながりを含意せず、見目で分からないものに使われる。類例として composed などがある (例は(33))。

- (32) a. a desk made of wood b. a house made of sweets

(cf. the sauce made from apples and onions)

- (33) a. an ancient building composed of brick and wood

b. an artist unit composed of Taylor and Jepsen

また受け身文で made of が現れることもある(34)。この場合、主語が A (of の目的語) を材料として、見目を引き継ぎ出来上がる。類例として(35)に示すように、consist, compose の用法もある。

- (34) a. This chair is made of good oak. b. The committee is made up of five members.

- (35) a. The alphabet consists of 26 letters. b. The class is composed of 30 students.

類似の用法として、人の出自を表す【出自(A: 単体)】の用法がある。(36)のような例がある。

- (36) a. She comes of good stock. b. He was born of a wealthy family.

なお make を使った用法で、【人の変化(A: 単体)】がある。ここでは人が、あるものになる / 変わることを意味する。A (of の前置詞) が材料となって、B が生じる (例は安藤(2012: 57-8))。

- (37) a. I'll make a teacher of you. c. You are making a fool of yourself.

b. Hunger makes a thief of any man.

さらに抽象物が出現する【抽象物の出現(A: 単体)】の用法がある。(38)のような例がある。

- (38) a. a shriek of delight b. a cry of joy c. a gasp of astonishment

また出現するものの量を述べる用法【出現物の量(A: 単体)】がある。(39)のような例がある。

- (39) a. Much is expected of research in the future. b. Little is expected of him.

最後に【出現物の無表記(A: 単体)】の用法がある。出現するものが表記されないが、含意され、それに対して行為が行われるという意味になる。大西他(1996: 129)は(40)の例を示し、(40a)ではその本を直接読んでいるが、(40b)ではその本に関する別のものを読んだと記している。別のものとは、ここで言うと、the book を起点として出現したものを読んだという意味になる。

- (40) a. I read the book. b. I read of the book. (大西他 1996: 129)

ただ他動詞の後ろに前置詞が入るのは、of だけではない。前置詞が異なれば、意味も異なる。他動詞(41a)では〈what you did〉はそのまま行為対象であるが、of が入る(41b)では、〈what you did〉から出現したことや、of の目的語から〈取り出したモノ〉を考えている。about を用いる(41c)では、出現とか取り出しという含意はなく、それにまわりつくことまで考える意味になる。

- (41) a. You should think what you did. c. You should think about what you did.
b. You should think of what you did.

類例として(42) - (44)があるが、(44b)の from は移動の起点を表すだけなので、from の目的語と主語には、移動の起点以外のつながりはない。

- (42) a. I know the boy. b. I know of the boy. c. I know about the boy.

- (43) a. I dreamed of the actor. b. I dreamed about the actor.

- (44) a. I heard of the girl. b. I heard from the girl.

また(45)のように自動詞の用法しかないものや、決まり表現などで使われる場合もある。さらに(46)は、安藤(2012: 65-66)で「inform 人 of 事柄」タイプとするもので、同様に of の目的語から出現したのに対して、行為がなされている(46)の例は安藤(2012: 65-66)。

- (45) a. He complained of his boredom with this occupation. c. He speaks well of his son.
b. She is the last person to speak ill of others. d. The teacher spoke of his visit to Kyoto.

- (46) a. He telephoned to inform her of his success. c. This picture reminds me of my childhood.
b. They accused him of theft. d. You have persuaded me of your innocence.

尋ねたり求めたりする場合には、A(of の目的語)から出現するものが表現されたり、表現されなかったりする。ask は、question などを目的語に取る場合、出現するものが表現されない。(47)では求められて出現するのは答えだが表現されない。A(of の目的語)は単に出所となる起点を示すだけの働きをする。一方(48)では reason や participation など、出現するものが明記されている。

- (47) a. You may ask a question of any other member.
b. I had a chance to ask some questions of him.

- (48) a. We should inquire the reason of their sorrows.
b. Participation in this chat is required of the members.

5.2 状態・態度の出現

[状態・態度の出現]には、3つ用法がある。一つめは【感情の出現(A: 単体)】がある。A(of の目的語)により、主語がある種の感情を出現させる意味になる。例として、(49)のようなものがある。

- (49) a. She is afraid of the barking dog. d. The boy is tired of watching television.
b. He is very proud of his house. e. The man was ashamed of his behavior.
c. I am glad of her success. f. She is not frightened of anything.

次に【判断の出現(A: 単体)】がある。A(of の目的語)から、話者の態度や判断が出現する。

- (50) a. I am sure of his honesty. b. I was certain of winning the game.

最後に状態特性が出現する【状態特性の出現(A: 複合体)】がある。これは It is 形容詞 of 人 to do … の構文において現れるもので、to 不定詞の行為が、A(of の目的語)から出現した属性 B に相当するという意味になる。B(被修飾要素)が状態特性(属性)であり、形容詞として表現される(例は(51))。そのため B が状態特性(属性)でない場合、(52)のように、前置詞には for が用いられる。

- (51) a. It is kind of you to say so. c. It is clever of her to solve the difficult problem.
b. It is nice of you to come and see me. d. That was foolish of him to accept her offer.
(52) a. It is important for us to do our best. b. It is interesting for me to hear their opinions.

5.3 行為の出現

まず行為が出現するという【行為の出現(A: 単体)】の用法がある。これは A(of の目的語)が起点となり、そこから行為が出現する。例として、(53)のような例がある。

- (53) a. He came to you of his own free will. c. You should tell me of your own accord.
b. She told a lie out of necessity. d. They joined the union of their own volition.

次に【行為の主語(A: 単体)】がある。A(of の目的語)が行為の主語になっている。行為者 A から、行為 B(被修飾要素)が出現したと考える。用例によっては、行為ではなくイベントを表す場合もある。一方 A(of の目的語)に、行為の目的語が現れる場合は、6節の特徴づけの用例と考える。何を行為対象とするかは変項(x)とみなし、行為者は行為の起点と考えるからである。以下、行為の主語と見なされる用例をあげる。

- (54) a. the arrival of the police c. the request of the president e. the decline of health
b. the barking of dogs d. the roar of the engine f. the swelling of the eyes

5.4 イベントの出現

最後にイベントの出現がある。これには【原因から出現(A: 単体)】の用法がある。これは(55)に示すような死亡の原因を表すのが、典型的な例になる。A(of の目的語)が原因となり、死亡というイベントが出現したと考える。それ以外の原因からの出現には、名詞 of 名詞の用例(56)も存在する。

- (55) a. He died of lung cancer. b. The soldier died of his injuries.
(56) a. I felt the pangs of conscience. b. They are still feeling the pain of headache.

6. 〈特徴づけ〉の of

〈特徴づけ〉の of では、A(of の目的語)と B(被修飾要素)が単につながっていて、関連付く。そこには方向の含意がないため、移動や出現の意味とは全く異なる意味になる。スキーマは(6)になる。ここで A と B が移動せずに関連付くことができるのは、B に変項(x)があるからと考える。B(被修飾要素)に変項(x)があり、その値が何かと言うと A(of の目的語)であるとなる。つまり B はこの変項によって A と関係づけられる。ただこの変項(x)は、各々の単語にとって、必ずしも必然的なものとは限らない。変項を義務的に持つものもあれば、変項を随意的に持つものもある。義務的であれば意味が不足しておりそれを補完する。随意的であれば、追加で意味を補充する働きをする。なおここでも A(of の目的語)が単体か複合体かで大きく2種類に分けられる(スキーマは(7))。

6.1 具体化

まず最初の特徴づけに【具体化(A: 単体)】がある。B(被修飾要素)を、より具体的に述べたり、より狭めて述べるものが、A(of の目的語)に現れる。同格表現になっていることも多い。このとき、B に変項(x)が生じ、その値として、A が関係づけられる。(57a)で言えば、Republic はどこかという、Liberia という意味合いで用いられる。(57)に示すように、固有名詞で用いられることも多い。

(57) the Republic of Liberia, the City of New York, the continent of Europe, the State of Florida, etc.
固有名詞以外にも、上記以外の表現で、(58)に示すように数多くの用例が見つかる。

(58) the month of July, strong feelings of anger, the problem of poverty, the joy of seeing the finished result, an attitude of 'let's do it ourselves', the problem of how to distribute the textbooks, danger of collapsing, etc.
このとき類例として A と B が、種と類の関係になる場合がある。それが(59)のような例になる。

(59) the sport of wrestling, the art of sculpture, the art of music, the entertainment of the rugby, etc.
さらには kind や sort など種類を表す表現が B(被修飾要素)に現れ、具体的には何の種類かということが A(of の目的語)で特定されるものもある。(60)がその例になる。

6.2 出自の特定

次に A(of の目的語)が出自を表す【出自(A: 単体)】の用法がある。これは A がコピーや写真などの大元を表す意味になる。例として(61)のような例がある*³。ここでも変項(x)が存在する。

(61) a copy of the letter, a duplicate of the original photo, a counterpart of the certificate, a map of Stockholm, a picture of an airport, an abridged version of the chronicle, etc.

6.3 中身の特定

容器の中身を特定する【中身の特定(A: 単体, 複合体)】の用法がある。B(被修飾要素)に容器がきて、その容器の中身が変項(x)となっている。A(ofの目的語)に変項の値が現れる。

(62) a bag of groceries, a bottle of wine, a bowl of milk, a can of soup, a glass of beer, a cup of sugar, etc.

類例として、群れを表すものがB(被修飾要素)に来る場合がある。

(63) a herd of cattle, a bunch of disks, a school of dolphins, a flock of geese, a swarm of wasps, a crowd of curious people, a cluster of stars, a family of operating systems, a pair of socks, etc.

また同様の用例として、度量衡の単位がB(被修飾要素)に来る場合もある。ofの後の名詞がどれほどの数・量であるかを、B(被修飾要素)が表す。ここでもBに変項(x)があると考えられる。

(64) a pound of chocolate, a kilo of coffee, a liter of oil, a few pints of beer, etc.

さらには単位ではなく、量の多さについて述べる表現がB(被修飾要素)に現れる場合がある。

(65) thousands of people, hundreds of activities, dozens of countries, a lot of wool, a couple of characters, none of the people, all of the service tags, a bit of salt, much of the time, etc.

6.4 行為の目的語

特徴づけの用法の一つに、【行為の目的語(A: 単体)】がある。Bに行為名詞が現れ、Aに行為の目的語が現れる。Bに、被動者の変項(x)があり、その値がAと関係づけられる。行為の主語は、〈出現〉であった。行為者は行為の起点と考えるからである。一方行為の目的語の場合、何を行為対象とするかは変項(x)とみなす。起点(行為者)から発せられた行為が、行為対象に何を選ぶかは、一つの選択と言える。この選択を変項(x)と見なす。この変項(x)の値が、A(ofの目的語)になる。

(66) a. the discovery of the monument
b. the delivery of medicine and healthcare
c. the conquest of the land
d. the writing of this article
e. the announcement of the poster session
f. the murder of a little girl
g. an extensive search of the park
h. the breaking of glass

6.5 属性の特定

次に【属性の特定(A: 単体, 複合体)】の用法がある。これはA(ofの目的語)に、Bの際だった特性が現れる。随意的変項で、必ずしも必須ではない。ofの目的語Aは、例えば(67a)で言えば、ironそれ自体は特性を数多く持っている。その一つとmanが関連付けられる。つまりmanの属性(x)が、ironの典型的属性によって特徴付けられる。メタファー的な結びつきでの関連づけになる。

(67) a. He is a man of iron.
b. The man has the eyes of a leopard.
c. We could not but admire his courage of a lion.
d. Your father was the man of steel.

次に「of + 抽象名詞」の形を取り、B(被修飾要素)の特性を述べる場合がある。名詞of名詞の形をとる(68)のような例に加え、(69)のようにof句がbe動詞の後に現れることもある。これもまた(67)のような例と同じで、Bの属性の特性を表している。

(68) a man of wisdom, a woman of ability, a thing of value, an air of luxury, something of worth, etc.

(69) a. What they did was of some importance. c. The map of this town is of little value.

b. Your claims are of no interest to me. d. They have been of great service to others.

また年齢など具体的な数値が A(of の目的語)に現れる場合もある。(70)は A に年齢が、(71)は A に B(被修飾要素)の具体的な数値が現れている。

(70) a. He is a man of fifty. b. I know a woman of 35.

(71) a. They expect an increase of 200 million dollars.

b. The rocket was launched from a distance of 200m.

c. The gas is precompressed to a pressure of 10 MPa.

d. There was an increase of 12% in October 2020.

また属性には、A(of の目的語)に年号や期間が現れる場合がある。この場合、年号や期間が持つ属性と結びつけられている^{*4}。年号や期間から、何らかの属性を引き継いでいる。

(72) a. In the presidential election of 1908, he supported the Democratic candidate.

b. You will forget the painful experience of the past ten years.^{*5}

6.6 不足 / 追加情報の特定

特徴づけの最後に【不足 / 追加情報の特定(A: 単体, 複合体)】の用法がある。ここでも義務的な変項と、一時的あるいは随意的な変項がある。まずこの用法には B(被修飾要素)に制作者や所有者等が現れ、A(of の目的語)に、その変項(x)の値が現れるものがある。

(73) a. the inventor of television c. the composer of Japan's national anthem

b. the organizer of the music festival d. the supporters of the winning team

また親族関係 / 役職関係など関係を表す場合がある。親族語 / 役職語 / 関係語が B(被修飾要素)に現れ、その変項(x)が A(of の目的語)に現れる。その例が(74)–(76)になる。

(74) the nephew of Abraham, the father of Nobunaga ODA, the mother of the emperor, etc.

(75) the king of Spain, the dean of the college, a president of the United States, etc.

(76) a colleague of mine, a friend of yours, a relative of the woman, a close associate of the composer, an enemy of mankind, etc.

また the time や the day など、時を表す表現が B(被修飾要素)に現れ、変項(x)が A(of の目的語)に現れ、関連づけられることがある。

(77) a. We lost the family at the time of the war. b. I was busy on the day of the wedding.

それ以外にも変項(x)が生じ、A(of の目的語)が変項(x)の値となることは多い。その例を以下にあげる。変項(x)の内容も多岐にわたる。ここでも変項(x)は、義務的に要求される場合と、随意的に一時的に要求されて生じる場合があり、その度合いは段階的である。義務的な場合、不足する情報の補完を行う。随意的の場合、追加情報として付加される。

(78) a member of the basketball team, a sample of the file format, a specimen of insects, the topic of your presentation, the data of all our users, the reason of being late, the opportunity of

working with you, evidence of torture, the results of the tests, the smell of burning, the color of his T-shirt, the height of the window, the rights of children, the cause of the accident, the idea of publishing a daily paper, my memories of my childhood, etc.

最後に変項(x)が形容詞に現れる例がある。(79)がそれで、形容詞が何に関してそうなのかを、A(ofの目的語)で特定する。形容詞に変項(x)があることで、他とやや異なっていると考えられる。

- (79) a. My grandmother is hard of hearing. c. He is easy/difficult of access.
b. She is slow/swift of foot. d. My father was strong of arm.

7. まとめ

本稿では前置詞 of を考察し、その意味と、意味の広がりについて見た。そこでの結論は、中心スキーマから、大きく3つの意味が生じるとした。一つは〈移動〉の意味、二つめに〈出現〉の意味、三つめに〈特徴づけ〉の意味があった。そして各々、さらに多様な用法があることを見た。

本稿では、前置詞 of の本質は「離れたつながり」にあると主張した。これをスキーマで表した。このつながりには、移動の概念を含むものと、含まないものがある。さらには(ofの目的語)が単体か複合体か、of句が位置特性を持つかでも分類された。ofの意味は多様ではあるが、そこには中心スキーマがあり、そこから3つの意味が派生し、さらに多様な用法があることを示した。こうした考察を他の前置詞にも適用できるかどうか、さらに検討を進めていきたいと考えている。

注

- *1 単に移動の起点を示す from との違いを端的に示す例文として、次のようなものがある。
(i) Wayne Morse was from Wisconsin but of Oregon. (Lindstromberg 2010: 42)
- *2 out と out of には使い分けがある。開口部に out of を用いると容認性が落ちる。
(i) a. He walked out/?out of the door. b. He walked out of/*out the house.
(Lindstromberg 2010: 33)
- *3 この用法に、A(ofの目的語)に作品等の製作者を表すものを加えることが出来るかも知れないが、of句ではなく属格表現の方が、より普通に用いられることもあり、ここには含めない。
(i) the plays/comedies/tragedies of Shakespeare (cf. Shakespeare's plays/comedies/tragedies)
- *4 上田(2018: 154)が指摘するように、(i)における of と in の使い分けは、結びつきの違いにある。
(ia)のように in を使うと、1825年と選挙との関連は低く、単に「その年にあった選挙」の意味でしかない。一方 of を用いると、1825年と選挙の結びつきは強く、「1つのまとまり」の感がある。
(i) a. the presidential election in 1825 b. the presidential election of 1825
- *5 (72b)の experience と年数は、(i)のように順序を反対にする表現も存在する。経験としっかりつながった10年ということになる。つまり何につながるかで、ofの目的語が決まる。
(i) He has over ten years of experience in this field.

参考文献

- 安藤貞雄 (2012) 『英語の前置詞』 開拓社.
Collins Cobuild English Guides 1. Prepositions. (1991) London: Harper Collins Publishers.
Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language.* U.K.:

Cambridge University Press.

小西友七 (1976) 『英語の前置詞』 大修館書店 .

Lindstromberg, S. (2010) *English Prepositions Explained*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.

緒方隆文 (2020) 「意味とカテゴリー：前置詞 *at, in, to, for, from, on, by, with* の分析」『人間文化研究所年報』(31), 125-140.

大西泰斗, ポール・マクベイ (1996) 『ネイティブスピーカーの前置詞』 研究社出版 .

宗宮喜代子 (2006) 「英語前置詞 *of* の意味」『言語情報学研究報告』(11), 227-245.

友繁義典 (2016) 『英語の意味を極める II - 動詞・前置詞編 -』 開拓社.

上田明子 (2018) 『イメージ感覚で捉える英語の前置詞：39の前置詞を集中マスター』 開拓社.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)